

# オーエンの幼児教育における環境論

－性格形成学院での具体的方法から－

榊原 博美

## Owen's Theory of Surroundings on his Infant education

－From a View Point of Concrete Methods in the  
New Institution for the Formation of Character－

Hiromi SAKAKIBARA

The purpose of this paper is to consider the Owen's (Robert Owen) Theory of Surroundings on his Infant(early childhood)Education, from a view point of concrete methods in the New Institution for the Formation of Character. Robert Owen is famous for his social thought and his practice at New Institution for the Formation of Character. But his Infant Education theory bears essential part of his social thought and his theory of surroundings. As a result of this study, it has been clarified that both social surroundings and natural surroundings were important of his practice.

### はじめに

ロバート・オーエン (Robert Owen 1771～1858) は、18 世紀後半、イギリスで始まった産業革命期に、紡績工場経営者でありながら、社会主義思想に基づく社会改革を提言した人物として知られている。さらにはヒューマニズムの立場から、労働者の福祉と教育のためにさまざまな提言と改革を実践した人物でもある。彼の教育に関する功績として、スコットランドのニュー・ラナークにおいて自身が経営する紡績工場内に「性格形成学院」(New Institution for the Formation of Character)を建設し、当時において先駆的な教育を行った実践がある。

「性格形成学院」には、のちの幼稚園にあたる「幼児学校」と昼間の「小学校」、夜間に開設される「成人学校」が含まれていた。いわば生涯教育機関の先駆例ともいえるものである。幼児教育の歴史のなかでは、幼稚園の創始者としてフレーベルが良く知られた人物であるが、フレーベルがブランケンブルクに世界初の「幼稚園」を開設したのが 1837 年（開始は 1840 年）であることに比較して、オーエンの幼児学校開設が 1816 年であることから、幼児教育施設の歴史においても先駆的なものであるということが出来る。

保育思想に関しては、フレーベルがドイツロマン主義の流れから「万有在神論」に基づき、

幼児の生得的な能力の開花を援助するという受動的な教育という立場をとるのに対して、オーエンはベーコンに始まるイギリス経験論の流れを汲み、ロックの人間悟性論とも共通した積極的な「環境論」による教育を主張する教育論に立脚しており、両者の思想は幼児の発達を規定する二つの重要な側面を代表するものとして比較検討されることも多い。

また、戦後の保育内容の変遷において、1956年に幼稚園教育要領が刊行され、「健康・社会・自然・言語・音楽リズム・絵画制作」の6領域が設定されていたものが、1989年の改訂で「健康・人間関係・環境・言葉・表現」の5領域に改められた（保育所保育指針においても同様）のは周知のことである。6領域から5領域に変わるなかで社会と自然が環境として統合されたとすれば、環境のとらえかたとして、社会的な側面と自然の側面が含まれると考えることができるが、オーエンの環境論にはまさに社会の側面と自然の側面が含まれており、現行の保育内容を吟味するに際しても、あらためてオーエンの環境論を検討することには意義があると思われる。本稿では、先行研究におけるオーエンの幼児教育および環境教育論を概観したうえで、オーエンにおける幼児教育の重要性とその方法として環境を重視した性格形成学院での具体的な幼児教育の方法について検討したい。

## 1. 先行研究の概要と本稿の課題

オーエンの思想に関する研究は多くみられる。ただし、フレーベルをはじめとする他の著名な保育思想家に比べると、オーエンの幼児教育、保育思想に中心的に焦点をあてた研究は、管見の限りあまり多いとはいえない。しかしながら、オーエンの思想自体を把握する上でその教育思想との関連でそれらをとらえることは不可欠である。そのなかで、オーエンの教育思想の全容を体系的にまとめあげた著作として、芝野庄太郎の『ロバート・オーエンの教育思想』<sup>2)</sup>がある。芝野の研究は、18世紀後半から19世紀初頭にかけてイギリスに起こった産業革命が人間の生活様式と労働形態に与えた変化、および、これらの変化が教育におよぼした影響をオーエンがどのようにとらえ、どのように対処したかについてを中心テーマに据えながら、宗教、経済、政治と教育との関係、性格形成論、性格形成学院の具体像、教育制度論などを網羅した上で、オーエンの教育史上の意義についても考察しており、包括的にオーエンの教育思想を把握するのに適する文献である。

オーエンの幼児教育については、波多野完治の「オーエンの幼児教育」<sup>3)</sup>、知野根和子の「ロバート・オーエンの幼児教育について」<sup>4)</sup>などがある。波多野が1952年、知野根が1961年の論考である。戦後の幼児教育の取り組みの中で、オーエンが注目された背景がある。その後近年における研究として中井光司の「ロバート・オウエンの保育者論」<sup>5)</sup>とそれに続く「ロバート・オウエンの幼児教育論（Ⅱ）」<sup>6)</sup>が2009年に書かれている。これらオーエンの幼児教育についての論考に共通するのは、オーエンの環境教育思想における幼児期の重要性についてである。

環境教育の視座からは、斉藤新治の「オーエンの環境教育思想についての一考察」<sup>7)</sup>が1980

年に書かれており、ごく最近では、佐藤哲也の「オウエンの性格形成論における環境構成の視座」<sup>8)</sup>がある。斉藤はオーエンの限界も示しながら、オーエンの思想をやや批判的にとらえている。佐藤は、オーエンの環境構成の基本原理を抽出することを試みつつ、やはり彼の環境論の古典的性格と限界を看取している。オーエンの環境論に関しては、現行の幼児教育における「環境」重視の立場における「環境」との意味合いの共通面と相違性という視点からも今後検討していく必要があるだろう。

以上のような先行研究の成果に学びながら、本稿では、オーエンにおける環境の重視とそれにもとづく幼児教育の重要性について示した上で、性格形成学院幼児学校における具体的な幼児教育の方法を、社会環境重視の側面と、自然環境重視の側面から検討していく。

## 2. オーエンにおける環境の重視と幼児教育の重要性

オーエンにおける環境の重視、環境論立脚の背景には、主に2つの側面が考えられる。

第一に、思想的基盤としてフランス革命期の啓蒙思想や自然法思想、とくにイギリスの啓蒙的政治思想家ゴドウィンの「政治的正義の研究」に直接の影響を受けたことがある。オーエンが所属していた『マンチェスター哲学および文学協会』の学問サークルで、フランス啓蒙思想家の環境決定論とともに、ゴドウィンについても知りえていたといわれており、オーエン主義がゴドウィンのひきうつしと評される<sup>9)</sup>向きもあった。しかしながら、影響をうけたことが事実であったとしても、オーエンにおいては、単純な原理のひきうつしによるものではなく、実践を伴った上での独自の環境重視論であることは明らか<sup>10)</sup>である。それは、第二に、産業革命期のイギリスという彼の生まれ育った時代背景によるものである。彼は、19歳よりマンチェスターの「ドリンクウォーター」の紡績工場の支配人として、500人の職工を使用し、またニュー・ラナークの工場では200人の労働者の運命を握る企業家として、つぶさに、諸種の実践を積み重ねることによって、後天的な環境の影響にもとづく性格形成の重要性を確信した<sup>11)</sup>。このような社会変革期の時代にあって、貧困、浮浪、暴動、犯罪、階級間対立などのさまざまな問題状況の把握は、オーエンにおいては、工場人としての実際の経験に基づいていたのである。ゆえに、書斎的な観念での思想に対して实际的な経験を通じての思想である点にオーエンの独自性があるといえるだろう。

以上のような思想的基盤とそれを土台とした实际的経験から導き出されたオーエンにおける環境の重視は、どのようにまた彼の教育思想における幼児教育の重要性に結びつくのであろうか。それについては第一に、環境と性格形成との関連、次に性格形成における幼児期の位置づけという二つの側面からの理解が可能である。

まず、環境と性格形成との関連についてである。このことに関してオーエンが繰り返し主張しているのは、性格を形成するのはあくまでも環境なのであり、個人は自らの性格形成になんら責任を持たないということである。それはオーエンの、「人間の性格は例外なしに常にかれらの意志の及ばぬところで形成される。性格は前代の人々によって形成されていくものであるし、

また主として形成されている。人間の行為を統御し指導する力である観念や習慣をかれらが伝えるのである。それゆえ人間が自らの性格を形成したことは一度もなかったし、しようとしても不可能である<sup>12)</sup>」という文言からもうかがえる。彼は、「人間は自分の意志で自分の意見をいろいろつくり出す力をもってはいない。人間は、先行者ならびに自分の周りの環境によって精神的に刻印されてきた、されている、されるであろう事柄を信じざるをえないし、常に信じたいし、これからも信じていくであろうからである<sup>13)</sup>」というように個人が性格形成に責任を持たないことをくり返し述べている。それをたとえて、「ちゅうちょせず断言できることは、現裁判官によって法の裁きをうけ、死刑の宣告を下された何人かの者が、もし現裁判官と同じところで生まれ教育され、同じ環境に囲まれていたならまさにこの者が、現に高い尊敬を得ているほうの高官に対し同じ恐ろしい死刑の宣告を下していたであろうということである<sup>14)</sup>」とまでもいう。オーエン教育論における「環境が性格を形成する」という根本原理がこれらの文言に集約されている。

次に、環境によって性格が形成されるという根本原理が幼児教育の重視にどのように結びつけられるかについてである。それには、主に二つの側面がある。一つめは、前述の根本原理とも重なるが、幼児自身にこそ性格形成に対しての責任が全くないという点である。オーエンは「新社会観」の「性格形成論第二試論」で「性格形成のこれらの諸要因のどれひとつをとってみても、それは幼児の思いのままにならぬか、どのようにしても幼児の手で制しきれないものである。それゆえ（われわれにはそれと反対にどんなにか、ばかげたことが従来おしえられていたかもしれないけれども）幼児は自らの中につくられていく情操や習慣に対してなんの責任も負えないのである。これを理解できないところに社会の根本的誤謬が存在し、人類の悲惨の大部分が生じているのである<sup>15)</sup>」と述べて、性格形成の責任を幼児に帰する考えの根本的誤謬を指摘している。性格形成学院開院に際してニュー・ラナークで講術された「ニュー・ラナーク住民への講演」でも、住民に対して「あらゆる幼児はそのすべての肉体と精神の能力と性質を自分でどうにもできない力から与えられたのだということは、ひとつの事実なのではありませんか<sup>16)</sup>」「みなさん！幼児が自分に圧倒的影響力をもったこれらの環境の諸事情のうちのたった一つでさえ、しかもほんの少しでも、どうにかできるいかなる統制力ももっていないとすれば、こういう環境のもとに形成され配置された個人は、当然罰すべきだとか不親切に待遇してしかるべきだとかいう主張に、すこしでもすじの通ったところがあるでしょうか<sup>17)</sup>」「ところで、私たちは歴史的事実からつぎのことを知っているのではないのでしょうか。幼児たちは、すべての過去の時代をつうじ、かれらを囲んでいる人びとから言語・習慣・情操を教えこまれたのであり、その教わった以外のどんなものも自分の力で獲得することはとてもできなかったこと。あらゆる世代の人びとは、その前の世代の人びとと似たように考え行動したのであり、その間にあらわれた変化は、かれらの環境の出来事（経験の対象となり得るところの）によってかれらに強制されたものであったこと<sup>18)</sup>」と訴えかけている。幼児自身の手で制しきれないからこそ環境を整える必要性、その重要性が強調されるのである。

二つ目に、オーエンの発達観における幼児の発達の可塑性への着眼と生涯発達への影響の重視がある。オーエンは「性格形成論第二試論」で「子どもはひとり残らず外からの働きを受け入れる驚くほど精密な複合体である。問題の正しい知識にもとづいて事前事後のきちんとした配慮によって、子どもはどのような性格でももてるように集団的に形成される。さらにこの複合体は自然のその他のいっさいの被造物と同じく無限の多様性を有するものであるが、慎重な管理の下で忍耐強く努力することで、究極においては理性的な願いと欲求の真の姿そのものへと思いのままに形成される性質を分有している<sup>19)</sup>」として、幼児がいかに環境の影響を容易に受入れる存在であるかを述べている。

また、生涯発達における幼児期の影響の重要性についてオーエンは、「善または悪の多くは子どもの生活のきわめて早い時期から教えられるか、または習得される。気性あるいは気質といったものの多くは二歳にならないうちに正しくも不正にも、どちらにも形成される。多くの永続的観念は生まれて最初の十二か月の、いや六か月の終わりにさえつくり上げられてしまう。以上のことは子どもを注意して観察してきた人にとってはっきりしているにちがいない。ゆえに教えられなかったか、それとも悪く教えられた子どもは幼児期とその後の児童期と青年期を通じて性格形成上実質的な被害をこうむるのである<sup>20)</sup>」「もともと人間は、かれの幼い時にいろいろの適当な処置を加え、それを人生の初期全体を経て成人期にいたるまで確実に実施しつづけると、その人間の考えと行動は、かれの能力の獲得できる範囲内でどんな種類のものにもなるし、そのように仕込まれた人間の考え方や行動の仕方あるいは内容はすべて、全人類におよぼしても正しく最善のものだと自分で思い込むように教育されるものであります。人間の構造上そんなふうにできておるのです<sup>21)</sup>」というように、幼児期という人生の早い時期に形成された性格がその後成人になったときに対しても影響するという発達観を持っていたということができ、これらからも性格形成における幼児教育の重要性が導き出されるのである。

以上のように、オーエンの教育論における環境の重視が幼児教育の重要性に結びつくことが確認された。

### 3. 性格形成学院での実践における具体的な環境整備

前節で、オーエンの教育論における環境の重視と幼児教育の重要性が把握された。その理念を彼は具体的に性格形成学院の幼児学校で実践した。ここでは、幼児学校の実践を環境整備という観点から検討したい。

そもそもオーエンの幼児学校の設立には、次のような理由がある。それは、彼の性格形成論にもとづき、誕生の時から社会の悪風に染まらないうちに、最も本質的、基礎的なもの資本主義の下で、悪風にそまらずに、人間の幸福に最も本質的、基礎的なものをこの幼児期に与えようとしたことであり<sup>22)</sup>そのためにも環境整備が最も重視されたのである。

オーエンがまず整備したのは、新学院の建物である。それは、ニュー・ラナーク工場の中央やや南東部、川からひき入れた水堀を背にして建っている煉瓦三階造りである。間口 145 フィー

ト、奥行き 45 フィート。正面中央に立派な玄関がつき出し、入ってすぐ両側に階段がある。内部の一階は長さ 140 フィート、幅 19 フィート、高さ 9 フィート。二階は長さは同じ、幅 40 フィート。高さ 11 フィート 6 インチ。三階は長さ、幅は二階に同じだが、高さは 21 フィートで二列の窓で照明をとる構造になっている。堂々たるものだ。そしてその前庭に設計された囲いのある運動場が特徴である<sup>23)</sup>という。この運動場をオーエンは「ニュー・ラナークの子どもたち彼らがひとり歩きができるようになったときから学校に入るまでの間のための運動場である<sup>24)</sup>」としていた。幼児学校は新学院の一階の一室とこの運動場からなる。教室や運動場について彼はラナークの住民に、「この階下中央の部屋は子どもたちの使用にあてられます。子どもがこの部屋でやる主な仕事は、お天気の悪いときに遊んだり楽しんだりすることです。お天気のよいときは、この建物の前方にある柵でかこまれた地帯をつかわせます。なぜそうするかといえば、子どもたちの身体を頑丈にするには、かれらをできるだけ野外におらせたほうがいいからです。子どもたちがしだいに大きくなると、かれらは六才になるまで、すぐれた方法によってこういう教育をうけるわけでありませう<sup>25)</sup>。」と説明している。このことから、運動場における戸外遊びを重視していたことが伺われる。このように、新学院における、当時としては先進的な物的環境は、戸外の自然を環境にするという「自然環境」をオーエンが重視していたことによるといえよう。物的環境とそれによる自然環境の重視に加えて、オーエンが幼児教育でとくに重視したのは人的環境としての教師であった。

オーエンの幼児教育を取上げた知野根によれば、幼児学校における教師は、オーエンの幼児教育における最も重要な核心であるという。オーエンが望んだ教師像は「大の子ども好きでどこまでも子どもの面倒をよく見、しかも徹頭徹尾従順で、オーエンの命令に喜んで従いきれる人」であり、この理念に基づいて選ばれたのがジェームズ・ブカナンという貧しい一手職工とそれを補助するモリー・ヤングという十七歳の紡績工場の女工員であった<sup>26)</sup>。旧来の書物による旧式の教育制度によって養成された教師ではなく、むしろ当時においては学識や教養のないと思われる人物が選ばれたのである。幼児に対する接し方としてオーエンは二人に「どんな訳があろうと子どもを決して打つな、どんな言葉、どんなしぐさでもおどすな、罵言を使うな、いつも愉快的な顔で、親切に言葉も優しく幼児と話せ、また幼児小児にいえ、全力をあげてしゃべり遊び仲間を幸福にするようにしなくてはならぬ。年かきの四歳から六歳までのものは年下のものを特別に世話し、また力を合わせてお互いが幸福になるように教えよ。小児を書物でいじめるな。身のまわりにころがっている物の使い方や本性性質を教えるものだ、小児の好奇心が刺激され、それらについて質問するようになったときに、うちとけた言葉ではなしなさい<sup>27)</sup>。」と、徹底的に罰を廃するやり方を要求した。性格形成の要因が環境にあり、個人、とくに幼児にはその責任がないというのがオーエンの根本原理であることからして、決して罰を与えない教育方針が採られたことと、年長の者が年下の者の世話をするという、現代における異年齢保育の先駆的な実践をも垣間見ることができる。このような方針を実現するためにも人的環境としての教師は重要な役割を果たしたといえよう。



運動場における戸外遊びの重視だけではなく、オーエンは極力大自然の中で、日光を浴びる生活を強調したという。(オーエンが夏期、時計を一時間進めるサマータイムを実行したのは有名である。)「クラウドの溪谷の清澄な空気、運動場に注ぐ日光、そこで子どもたちは、健康的なしっかりした身体的な習慣をうえつけられた。暖かい日光と、清くすんだ空気の中で、親切で親しい幼い仲間と協力する訓練や、自然を観察し、ともども勉強し、一緒に遊戯する楽しさと幸福を実現した<sup>28)</sup>。」というように、戸外(オープン・エア)において大自然の自然環境を重視したことで仲間集団による協力という社会性を重視した点にオーエンの幼児教育における環境整備の特長がみられるのである。

#### 4. オーエンの幼児教育における社会環境と自然環境の重視

前節で、オーエンの幼児教育における環境整備の特長としての自然環境の重視が把握された。物的、人的両面における具体的環境整備の実践から導き出されるのは、オーエンの幼児教育におけるこの自然環境の重視と社会環境との重視である。社会環境については、まず第一に、根本的な理念として彼がそれを問題にしている点については性格形成学院開設にいたる経緯からして、当時の劣悪な社会環境による労働者の性格形成の問題が出发点であることから、大枠としての社会環境重視がある。それは、「他人が悪習に汚染し、偏見を有し、犯罪を犯すような諸性質をつくった原因が社会環境にある以上、如何なる人であっても、個人をもって、現在、無知極まる同胞に対して責任があるものとするのは不合理である<sup>29)</sup>」などの文言からも明らかであろう。さらに、オーエン自身が人間形成に及ぼす要因として自然と社会の二つを取上げている言葉として「自然と社会とは、人間を作るのである。故に人間性の形成に関する一切の責任は、この二つの自然と社会との力に帰する<sup>30)</sup>」がある。このような主張からも彼が自然と社会両方の環境を問題にしていることが伺われる。

オーエンが「幼児に協同社会性の態度を形成するために、協同の原理を理解した年上の幼児が、年下の幼児に、この原理を実践において教え、このようにしてすべての幼児が漸次的に、この協同の精神を浸透させられ、楽しい幼児学校を建設することができた<sup>31)</sup>」と述べるように、性格形成学院幼児学校の実践における、人的環境としての教師が子どもの仲間集団における協力を促す役割を果たすことで、子どもの社会性が発達することにより、幼児学校という協同社会における社会環境が整備されるととらえることができる。

さらにまた、オーエンが性格をいうとき、それは個人の性格に限定されるのではなく、個人の集団としての社会の性格を含めているということは、例えば性格形成論第四試論の「すべて地域社会の成員によって体験される幸福あるいは悲惨の種類と程度は、その地域社会を構成している個人の中に形成された性格しだいである<sup>32)</sup>」という主張や、「こうした性格をもった共同体<sup>33)</sup>」という言葉などからも把握される。したがって、オーエンは幼児個人だけでなく、幼児学校という社会における集団の性格をも問題にしているということができ、幼児の性格形成上、その社会環境としての幼児学校の性格を非常に重視していたということができる。

以上のように、オーエンの幼児教育の理念が具体的な実践として展開された性格形成学院幼児学校における環境整備の実際からは、物的環境と人的環境の重視から導かれる自然環境と社会環境の重視という側面が把握されるのである。

## 5. 幼児教育の具体的方法としての「地図」による学習の事例

前節までで、オーエンの幼児教育における環境の重視において、自然と社会、両方の環境を重視するという側面が把握された。ここでは、性格形成学院幼児学校における幼児教育の具体的方法の一例として、自然環境を把握し、それを通じて社会環境を把握するという「地図」による学習を取上げて紹介したい。

性格形成学院の幼児学校では一歳から六歳までの幼児を収容した。一歳から三歳までが第一組、三歳から六歳までが第二組で、各組とも 30 人から 50 人である。オーエンの幼児教育で特徴的なのは、当時においては画期的なその教育方法にあった。彼が幼児学校で採用した方法として、ダンス、音楽、軍事訓練がある。それらの方法については先行研究についてもつとに紹介されてきている。これらの方法に加えて、オーエンはこの第二組の四歳以上の幼児に地図を用いての地理学習を行なっている。自然の地形の観察は戸外の学習で、これと植物及び生物との関係と併せて観察させ、教室内では世界の地図について学習させている。そのためオーエンと教師であるブキャナンは、幼児が特別興味をおこすような地図の使用法や、教育方法について研究している。地図の学習指導方法は、地理を中心とした教育方法で、自然界の事物や生産物、動物が常に地図と結合して、相互に関連して生きた地理教育が行われていた<sup>34)</sup>ということである。

オーエンは「小児を書物でいじめるな。身のまわりどころがついている物の使い方や本性・性質を教えるものだ、小児の好奇心が刺戟され、それらについて質問するようになった時にうちとけた言葉で<sup>35)</sup>」というように、実物教授による直観を重んじた。そして幼児教育の教室には「動物の絵や地図を備えつけ、庭や畑や森からの自然物がよくおいてあった<sup>36)</sup>。」ということだ。「四歳以上の小児は、わざと彼らの注意をひくように室内にかけてあった大規模な世界中の地図の使い方を、早くから知たがったものだ。先生のブキャナンはまずその使い方を、ついで子どもたちの興味をひくような教授法を、教えられた、一何でもがこれら幼児の興味をわかすようにつくられていたから<sup>37)</sup>。」と、オーエンが意図的に実物教授の教材として地図をかけておき、幼児の興味を喚起するというように、現在の幼児教育、保育現場でも重視されている環境整備と同様の、幼児の興味のあるかじめの予測に基づく環境整備をしていることがわかる。

このように、戸外学習による自然観察と結びついた「地図」による地理学習は、オーエンの幼児教育において自然と社会の両方を把握するのに効果的な方法であったといえよう。さらに考察を深めれば、この具体的方法が現行の幼児教育、保育現場における環境整備にも共通する「意図的な環境整備」というとらえかたをすることも可能であると思われる。



## おわりに

本稿では、現行幼稚園教育要領、および保育所保育指針において保育内容として重要な項目である「環境」に含まれると考えられる自然と社会という視点から、社会思想家としてだけではなく、教育史上、教育思想家として、またとりわけ教育実践家として重要な人物であるロバート・オーエンの幼児教育における環境論をあらためて今日的に検討することを目的に論考してきた。それによって、オーエンの幼児教育理念が具体的な実践として展開された性格形成学院幼児学校における環境整備には自然環境および社会環境を重視するオーエンの思想が反映されていることが看取された。またそこに現行の幼児教育、保育における環境重視と環境整備にも敷衍できるような具体的な事例を垣間見ることができた。

翻って現在の幼児教育の内容を考えると、「環境」をどのようにとらえ、どのように整備していったらよいかは幼児教育、保育学研究者ならびに幼児教育、保育の現場の実践者双方にとって非常に関心の高い問題である。当然のことながら、それには第一に幼稚園教育要領、保育所保育指針の改定の経緯および内容を詳細に検討することが必要である。

本稿では、現行の保育内容を検討するための土台となる基礎的な研究としてオーエンの実践を検討することに課題を限定した。そのため現行幼稚園教育要領および保育所保育指針の内容である「環境」についての吟味とそれとの比較におけるオーエンの環境論という検討はできていない。それらについては今後の課題としたい。

## 【註】

- 1) 「私は明言しうる。幼稚園の創始者はまったくオウエンその人だ。フレーベルではない」(五島茂(1973)『ロバート・オウエン』家の光協会、p.159.)「1816年の新学院の開校からこの幼児教育を実行したオウエンは、『自ら世界空前の制度の実行の第一歩』といていように、かのフレーベルにさきだつ幼稚園の創始者であるともいわれうるであろう。」(森戸辰夫(1938)『オウエン・モリス』岩波書店、p.85.) など。
- 2) 芝野庄太郎 (1961)『ロバート・オーエンの教育思想』御茶の水書房。
- 3) 波多野完治(1952)「オーエンの幼児教育」『教育音楽』7巻5号、音楽之友社。
- 4) 知野根和子(1971)「ロバート・オーエンの幼児教育について」日本大学教育学会事務局『教育学雑誌』5巻。
- 5) 中井光司 (2000)「ロバート・オウエンの保育者論」生田貞子・水田聖一編『教師論・保育者論』三晃書房。
- 6) 中井光司 (2009)「ロバート・オウエンの幼児教育論(Ⅱ)」『兵庫大学短期大学部研究集録』43巻。
- 7) 斉藤新治 (1980)「オーエンの『環境』教育思想についての一考察」『新潟大学教育学部長岡分校研究紀要』26巻。
- 8) 佐藤哲也 (2001)「オウエンの性格形成論における環境構成の視座」『日本保育学会研究論

文集』54 巻。

- 9) ロバート・オーエン著、渡辺義晴訳（1963）『社会変革と教育』明治図書、p 181.その他、例えば『政治的正義』の初版が出された 1793 年はオーエンがマンチェスターに居を構え始めたときであった。この著書がオーエンの目に触れないはずがない。…かれの哲学的見解が深くその教説に影響されていることはまず確実のようである。」（フランク・ポモドア（1906）「新社会観」 斉藤新治訳『性格形成論』明治図書、p.161.）など。
- 10) オーエン自身、「これから述べられようとしている問題についての見解は、この 20 年間にわたる広汎な経験から得られたものであり、その期間を通じてその正しさと重要性は種々の実験の積み重ねによって証明済みである。」と述べている（ロバート・オーエン著、梅根悟・勝田守一監修、斉藤新治訳『性格形成論』明治図書、1974、p 26.）。
- 11) 前掲、『ロバート・オーエンの教育思想』p.240.
- 12) ロバート・オーエン著、梅根悟・勝田守一監修、斉藤新治訳『性格形成論』明治図書、1974、p 62.
- 13) 同前、p71.
- 14) 同上、p39.
- 15) 同上、p36.
- 16) 前掲『社会変革と教育』p.22..
- 17) 同前、p23.
- 18) 同上、p24.
- 19) 前掲、『性格形成論』p36.
- 20) 同前、p56.
- 21) 前掲、『社会変革と教育』p40.
- 22) 前掲、『ロバート・オーエンの教育思想』p.374.
- 23) 五島茂(1973)『ロバート・オーエン』家の光協会、p.152.
- 24) ロバート・オーエン著、楊井克巳訳『新社会観』p.68.
- 25) 「ニュー・ラナーク住民への講演」前掲、『社会改革と教育』p.16.
- 26) 前掲、知野根「ロバート・オーエンの幼児教育について」参照。
- 27) ロバート・オーエン著、五島茂訳（1961）『オーエン自叙伝』岩波書店、p.250.
- 28) 前掲、芝野『ロバート・オーエンの教育思想』p.299.
- 29) 同前、『ロバート・オーエンの教育思想』p.242.
- 30) 同上、p.243.
- 31) 同上、p.90.
- 32) 前掲、『性格形成論』p.95.
- 33) 前掲、『社会変革と教育』p.37.
- 34) 前掲、知野根「「ロバート・オーエンの幼児教育について」」p.79.

35) 前掲、『オウエン自叙伝』 p.250.

36) 同前。

37) 同上。

